

## 《研究ノート》

### 河北省磁県における水稻作の長期持続性について

林 良育\*

### Long-term sustainability of paddy rice cultivation in Ci County, Hebei Province

Kazuyasu HAYASHI\*

#### 要旨

磁県（磁州）は遅くとも五代以来、現代まで水稻作が継続されてきた華北でも数少ない地域の一つである。当該地域で水稻作が長期間継続できた要因を分析することで、華北において水稻作が長期的に継続される条件を明らかにできると思われる。そこで本稿では磁県の水稻作を対象に取り上げ、それが長期間継続されてきた要因を考察してみた。その結果として、①水稻作に必要な灌漑用水が十分確保されていたこと、②旱魃対策及び労働量抑制策として直播法が選択されたと思われること、③水稻作農家が収穫した稻米の一部を日常的に自家で食べており、自家消費用も兼ねて栽培されてきたこと、④水稻作農家が比較的裕福だったことから、稻米が高値で売却されていたと思われること、⑤塩類土壤の改良に効果があったことの5点を得ることができた。

#### キーワード

磁県、水稻作、直播法、移植法、塩類土壤

#### 緒言

華北における水稻作は、長江流域などの南方に比して、水稻の全穀物に占める比重が低いことから、日本では研究蓄積の少ない分野の一つである。しかしながら、中国では、古代乃至は古代～中世に当たる唐代までの華北においては現在との気候条件の違いなどもあって、水稻作が盛んであったとの説が提出されており<sup>1)</sup>、日本でも近年、原宗子氏が古代の華北において水稻が近代以降に比して重要な作物で

1) 王 (2000: 74-75) に「水稻在当时粮食生产中所占比重远比现今要大得多 (水稻是当时 [魏晋南北朝～隋唐] 的食料生产中占比例比现在大得多)。」とある。なお、引用文の原文は簡体字だが、新字に改めてある。以下、中华人民共和国の書籍については、本文・注釈の引用文及び書名とともに新字で表記しておくものとする。

\* 河合塾 (Kawai School) cbm20452@yahoo.co.jp

あったとの説を提出している(原 2016)。また筆者も華北の農業を描いた北魏の『齊民要術』や唐末・五代の『四時纂要』などの農書に見える水稻作について研究し、華北における水稻の具体的な栽培法を描き出してみた(林 2015; 2021; 2024)。宋代以降については、長江中下流域が穀倉地帯となった関係で、華北産の稻米が全土に占める比重は下がったこともあり、中国の研究者により華北における水稻作は唐代に及ばなかったとの見解が提出されている<sup>2)</sup>。しかしながら、宋～清代には首都である開封や大都・北京を中心とする首都圏の所在する華北において食糧増産のために政府により水稻が推奨された<sup>3)</sup>。従って水稻は宋～清代の華北の食糧生産において一定の重要性を保っていたといえるので、宋～清代の華北における水稻作の研究も、今後、深化される必要があるテーマであるといえる。

そこで本稿では前近代を中心とした華北における水稻作に焦点を当てるが、なかでも河北省南部の磁県における水稻作を取り上げてみたい。政府主導により水稻作が奨励されたケースでは、多くの場合、一時的に成果を挙げても、最終的に定着することなく、水田が縮小・消滅してしまった事例が多くあった。例えば、『寶坻勸農書』を撰述・頒布して現在の天津市の宝坻区(東経 117.3 度、北緯 39.7 度)にあたる宝坻県に水稻作を教導した袁黃による水田造成もそうした失敗例の一つであった<sup>4)</sup>。しかしながら、同じ直隸省の中には、中央政府や地方長官の主導で開始された水稻作が定着し、現在に至っている事例も存在する。こうした成功例は僅少ではあるものの、成功の要因を分析することで、華北で水稻作が永続する条件を導き出す大きな手掛かりとなると思われる。本稿において磁県を取り上げるのはこうした成功例の一つであるからである。

## 1. 先行研究の検討

磁県の水稻作については、中国の研究にしばしば言及されているが、管見の限り専論は見られない。但し、磁県を通じて西北に流れる滏河流域(河北省南部)の16世紀以来の水稻作を論じた潘(2015)が磁州(磁県)の水稻作についても取り上げており、磁州で現在に至るまで水稻作が継続した要因として、灌漑用水の確保を前提に論を進めている。しかし、灌漑用水の確保という点では宝坻県でも水稻作が導入されているように条件は備わっていたが、短期間で畑作に切り替えられてしまつており、灌漑用水の確保は華北における水稻作の必要条件ではあっても、十分条件ではなかつたことが分かる。また、潘(2015)は水利施設の整備を中心に考察しているため、具体的な水稻作の様子についても簡単に言及するに止まっている。そこで本稿では、灌漑用水以外の華北における水稻作の継続の要因について考究するとともに、磁県の水稻作の様子についても考察してみたい。

2) 張(1999: 305)に「但種植水稻地域不僅比前代廣泛，甚至宋，遼，金，元時代，也難以與唐抗衡(ただ[唐代に]稻を植えた地域が前代に比して広範だっただけでなく、更に宋・遼・金・元代でも唐代に対抗するのが難しかつた)。」とあり、游(1995: 277)に「漢唐時期因水利条件較好，故稻作也以這二時期為最發展(漢代と唐代は水利条件が比較的良かったことにより、稻作もこの二時代が最も発展した)。」とある。

3) 宋～清代の華北における水稻作については曾(2018)などを参照。

4) 袁黃は明(1368-1644)の嘉靖(1522-66)～万曆(1573-1620)期の官僚・文人で宝坻県の知事として県の朝廷への獻上品の廢止などの善政を布き、県民の人望を得て、県に郷里(現在の江蘇省蘇州市)である江南の移植法による水稻作を教導した。『寶坻勸農書』は水稻作教導のために袁黃が撰述し県内に頒布した農書で、元代の王禎『農書』などの先行する農書の内容を中心にまとめたものであるが、施肥や水利の部分に特徴があるとされる。但し、袁黃が造成した水田は、乾隆『寶坻縣志』卷十六に

寶坻民尊信其説，踴躍相勸，及袁公去而其蹟廢焉逮我。

宝坻県の民は袁黃の説くことを尊敬・信頼し、勇躍して水田の造成に始めたが、袁黃が県を去るに及んで、彼の残した水田は廃絶して我々の時代に至っている。

とあるように、袁黃の離任後、ほどなくして水稻作は行われなくなっていることが分かる。

## 2. 磁県について

まず磁県について簡単に説明しておきたい。この県は現在の河北省邯鄲市に属し、省の南部に位置する（東経114.4度、北緯36.4度）。歴史的には磁器の名称の由来にもなった磁州窯の所在地として名高く、北京から南下する際の交通の要地でもある。この交通の要地である点が、後述する磁県産の稻米の販売の問題や現在、磁県産の稻米が磁県大米という地方のブランド米に発展したことに影響をあたえていると思われる<sup>5)</sup>。磁県の水稻作の中心は滏河流域であり、民国『磁縣縣志』第八章物産の農產品・稻に

吾磁產稻區域多在滏河兩岸，尤東西閘附近爲多。蓋以其地田低水足，地質肥美，於稻特宜。

わが磁県の水稻を産出する区域は滏河两岸に多く、とりわけ水門の近くは多くを産する。思うにその水田が低い位置にあり水が十分であり、土壤の質も肥沃で、特に水稻によいからであろう。

とあるほか、解放後も孫（2001: 172）では滏陽河両側低洼易澇地平原区を

地上水資源豊富，土地肥沃，是優質水稻和蓮藕生産的重要基地。

地上水が豊富で、土地は肥沃であり、優れた品質の水稻とレンコン生産の重要な基地である。

と評している。

## 3. 磁県の水稻作の歴史

次に、磁県（磁州）における水稻作の歴史について概観してみたい。磁県における水稻作に関する最も古い記録は『冊府元龜』卷678・興利にあり、

漢・慕容彦超爲磁州刺史，地饒水田。則西門豹・史紀所理漳・滏十二磴之遺跡也。時郡邑以薦饑，溝渠堙塞。彦超日引己之親僕及郡衙散卒，出俸錢以給其食，自旦及夕，親令開鑿，期歲之間，民得其惠。

五代の後漢の慕容彦超が磁州刺史となった時、その地は水田が豊富であった。それは戦国時代の魏の西門豹や史起の造成した漳水・滏水十二の水利施設の遺産であった。当時、州にしばしば飢饉がおきて水利施設の整備に手が回らず、水路が塞がっていた。彦超は日々、自身の親族や従僕と州の役所の従卒を率い、俸給を出して食料を供給して、朝から夕方まで作業して、自ら水路を開鑿したため、一年の間に、磁州の民はその恩恵を受けることができた。

というように、少なくとも五代（907-960）の後漢（947-950）の時代には既に水稻が栽培されていたことが確認できる。『冊府元龜』の記述から戦国時代（前403-前221）の魏の西門豹、史起ら地方長官の水利施設の造成を契機に水稻作が始まられたことが分かるが、魏の史起による漳水を利用した灌漑により鄆周辺で水稻作が始まったことは『呂氏春秋』先識覧・樂成にも見える<sup>6)</sup>。史起が灌漑したのは鄆周辺なので、直接に磁県で水稻作が始まったことを示すものではないが、鄆は後の臨漳県で磁県の東隣に位置するので、磁県の漳水流域でもこの頃に水稻作が始まった可能性が高い<sup>7)</sup>。なお、史起の水利事業は塩類アルカリ土壤の改良を伴うものであるが、磁県の場合にも同治『磁州續志』卷6藝文志の中の楊方

5) 磁県大米については磁県人民政府ホームページなど参照。

6) 『呂氏春秋』先識覧・樂成に「鄆有聖令，時爲史公。決漳水，灌鄆旁，終古斥鹵，生之稻粱（鄆に優れた長官があり、時の長官は史起様である。漳水の流れを導いて、鄆の周辺を灌漑し、古くからの塩類アルカリ土壤を終わらせ、稻やオオアワが生えるようにした。）」とある。

7) 磁州の漳水流域で水稻が栽培されていたことは、民国『磁縣縣志』第八章物産の農產品・稻に「漳渠一帶現亦有植者（漳水から引いた渠の一体は今でも水稻を植える者がある。）」とあることから分かる。

晃「知即墨縣康公傳」に

邑西北二里康家莊，即今量斗莊。地勢窪下荒鹹，賦無所出。公相地形，解囊開渠，令南方踏歌男女教種稻秧。一村變爲膏壤，磁民效之，稻田由此漸闢。

邑の西北2里にある康家莊は、今の量斗莊である。地勢が窪んで低く荒れた塩類化した土壌で、租税を払えなかった。康霖生は地形を吟味して、お金を出して渠を開鑿し、南方の踏歌を歌う男女に稻の苗を植える方法を莊(村)民に教えさせた。これにより一村は肥沃な土地に変わり、磁州の民もこれに倣った。水田はこれにより次第に開墾されたのだった。

とあり、やはり塩類化した土地があり、その土壌の改良のために水稻作が利用されていた。この例から、塩類土壌の土壌改良が水稻作が長期間継続した要因の一つになっていたものと思われる。

その後も、『宋史』卷173 食貨上一・農田之制に

遣尚書職方員外郎沈厚載出懷，衛，磁，相，邢，洛，鎮，趙等州，教民種水田。

(仁宗は) 尚書職方員外沈厚載を派遣して、懷、衛、磁、相、邢、洛、鎮、趙等州に出向き、民に水稻の植え方を教えさせた。

とあり、今度は中央政府により中央の官僚が派遣され磁州に水稻作が教導されていることが確認できる。その後、潘(2015: 214)によれば金(1115-1234)・元代(1271-1368)には水稻作は衰えたとされるが、明代以降の磁州の水稻作に関しては、清の同治『磁州續志』卷6の州内の優れた文章を集めた藝文記の中の一文に「磁境水田原始記」(以下、「水田原始記」という史料がある。作者は不明で、書かれたのは清代の康熙39年(1700)前後からこの『磁州續志』が編纂された同治13年(1874)までの時代、そしてタイトルから見て磁州管内の水田の起源を記したものであると思われる。その中に明代のこととして

磁境滏河引其流以溉田，舊有南北中三渠。中渠爲州牧包公宗達開於前明洪武年間，南北兩渠則州牧孫公健・牛公維赤先後開于萬曆年間。三渠分溉各村稻田二百餘頃。

磁州では州内を流れる滏河の流れを引いて農地を灌漑しており、古くは南北中の三つの渠があった。中渠は州の長官包宗達が明代の洪武年間(1368-98)に開鑿したものであり、南北の二つの渠は州の長官孫健と牛維赤が万曆年間(1573-1620)に前後して開鑿したものであった。三渠は分かれて各村の水田200余頃を灌漑した。

とあり、明代に三つの渠が開鑿されて水田を灌漑していたことがわかる。続いて、「水田原始記」には國朝州牧蔣公擢又于各渠接開小渠溉稻田二百餘頃，民生用是饒裕。

清の州の長官の蔣公擢(康熙『磁州志』の撰者で康熙39年頃の磁州知事)は更に各渠につなげて小渠を開鑿して、水田200余頃を灌漑したので、磁州の民の生活はこれにより豊かになった。

とあり、清代に入っても地方長官による渠の造成が行われたことを契機に水稻作が広まっている。潘(2015)によると、その後、18世紀以降、滏河の水源の泉水の湧水量が減少したことから<sup>8)</sup>、河川の水量も減少したことで灌漑用水も減少したが、磁州は下流に流す河水を抑制することで灌漑用水を確保し<sup>9)</sup>、20世紀に入っても水稻作が継続されたとされる(潘2015: 221-223)。

8) 潘(2015)は泉水の湧水量の減少に関する史料として河北省農田水利委員会が1936年に編纂した「開鑿磁縣滏河河泉報告書」「河北農田水利委員会第二屆籌弁鑿泉成績書」を挙げている。但し、この史料は日本国内に所蔵図書館が無いので筆者は確認できていない。

9) 潘(2015: 222)によれば下流に位置する永年県が、磁州が下流の水田を維持するのに十分な河水を流さないことに對し、訴えを起こしたため、朝廷は新たに両県の分水原則を制定したが、効果は限定的だったとする。

## 4. 磁県における水稻作

前節で水稻作の歴史については概観できたと思うので、次に磁県(磁州)ではどのような水稻作が行わっていたのかについて考えてみたい。

まず五代・後漢の頃は、長江流域では移植栽培(苗代に播種した後、苗を本田に移植して収穫まで育てる栽培法)が広まっていた時代であるが(大澤 1996)、華北については移植栽培(以下、移植法)が行われていたことを示す史料は確認されていない。また唐末・五代の華北における農業を描いたとされる『四時纂要』においては湛水直播法(水田に入水後、直接播種して収穫まで育てる栽培法)が描かれており(林 2024)、解放後の華北にも湛水直播が残っているので、恐らくは湛水直播が古くから行われていたと思われる<sup>10)</sup>。

次に、すでに『宋史』卷173 食貨上一・農田之制を引用して沈厚載が派遣されて稻作を教導したことを紹介したが、その事例から当時の稻作について考えてみよう。まず考えるべきは、その派遣の時期で、それが北宋(960-1127)の仁宗(在位 1022-63)の明道(1032-33)から宝元(1038-39)の間なので、五代の後漢(947-950)と時期的にあまり離れておらず、現地ではすでに直播法が行われていたと思われる。従って、すでにある直播法を教導する必要性は薄かったであろう。また、『淳熙三山志』卷26 人物類一によれば沈厚載は閩県(現在の福建省)の人だったので、そのことを勘案すると、磁州には長江流域で行われていた移植法が伝導された可能性があったと推測できる<sup>11)</sup>。しかしながら、その後、磁州では移植法が定着しなかったようで、康熙『磁州志』卷10 風土の土産の条に

稻【秔稻糯稻二種。宜渠地。五月種九月穫。】(【】は割注)

稻【ウルチ稻とモチ稻の二種類がある。栽培には渠周辺の土地がよろしい。五月に播種して九月に収穫する。】

とあり、直播法が行われていることが確認できる。

但し、一方で先にも引用した同治『磁州續志』卷6 藝文志の中の楊方晃「知卽墨縣康公傳」に

公相地形，解囊開渠，令南方踏歌男女教種稻秧。一村變爲膏壤，磁民效之，稻田由此漸闢。

康霖生は地形を吟味して、お金を出して渠を開鑿し、南方の踏歌を歌う男女に稻の苗を植える方法を莊(村)民に教えさせた。これにより一村は肥沃な土地に変わり、磁州の民もこれに倣った。水田はこれにより次第に開墾されたのだった。

とあり、順治年間(1644-61)の進士である康霖生が南方出身の男女に康家莊の民に稻の苗の植え方を教えさせている。教導したのが南方出身の男女であることを考えても、この稻の苗の植え方というのは移

10) 華北では旱稻も栽培されたが、磁県の場合、『冊府元龜』に「地饒水田」とあるので、水稻作が選択されていたことが分かる。磁県で水稻が選択されたのは、灌水による塩類土壤の土壤改良に加え、水田で栽培した場合、水稻の方が、収量が多く、連作も可能なので、水利工事を施した場合の費用対効果が高いためであったと思われる。なお、旱稻が水稻に比して収量が少ない点は民国『磁縣縣志』第八章物産第四節農產品にも「旱稻以其澆灌費力，收穫不豐。故種者甚少(旱稻は灌溉に労力を費やす割に収量が少ない。それ故に植える者は少ない。)。」とあり、旱稻を植える者が少ない理由とされている。また直播法の中でも湛水直播であったと推測したのは、湛水直播が『四時纂要』の出典となった北魏の『齊民要術』に既に見られるのに対し、現存する農書を含めて五代までの諸史料に華北での乾田直播に関する記述が確認できないこと、河北省の近隣ではないが、寧夏回族自治区では湛水直播が乾田直播に先行して行われていること(李 1963: 38)、湛水直播の利点として保温効果があり乾田直播より低温地域でより適しているとされ、雑草防除の効果の点でも乾田直播より優れていること、湛水直播が中国の直播法の主流であったことなどによる(田中 1997: 242-243; 于 2021: 125)。

11) 磁州だけでなく、五代に稻田務(官営の水田を管理する官署)が置かれた共城(『舊五代史』卷113 周書・太祖紀四に「廢共城稻田務(共城の稻田務を廃止する。)。」とある。なお、後周(951-960)は五代の最後の王朝で太祖(在位 951-954)はその初代皇帝である。)が属する衛州などでもすでに直播法が行われていたと思われる所以、沈厚載は移植法を教導した可能性がある。

植法を指すと思われ、康霖生が康家荘の農民に移植法を教導させたことをきっかけに磁州でも移植法による水稻作が広まったということになる。教導した正確な時期はこの記述からは分からぬが、順治は康熙(1662-1722)の前の元号であるから、順治～康熙年間のことと思われる。康熙『磁州志』の刊行は康熙25年(1686)のことなので、康霖生がその荘園内に移植法を教導した時期と重複する可能性も考えられる。ここから清代でも一時的かつ地域的にも康家荘周辺といふ限定された地域だった可能性も考えなくてはならないものの、直播法と並行して移植法も行われたことがうかがえるといえよう。

なお、潘(2015: 224)によれば、磁州に隣接する永年県では解放初の頃には乾田直播(水をはらない水田に播種した後に入水して収穫まで育てる栽培法)が行われていたとされるが、これは磁州が灌漑用水を確保するため滏河の下流に河水を流す量を抑えたことにより、より灌漑用水が少なくてすむ乾田直播が行われていた可能性が考えられる。

## 5. 水稻作持続の要因

それでは磁県(磁州)で五代以前から水稻作が、金元間には断続的だった可能性は残るもの、続けてきた要因は何だったのだろうか。

第一に挙げられるのは、潘(2015)も説くように水田用の灌漑用水が確保できたことがある。一般に水稻の栽培には降水量に換算して1000mm以上の水が必要とされているが(堀江2015: 17)、華北は降水量だけではその条件を満たしておらず<sup>12)</sup>、また乾燥のために水田の蒸発散量が多いので、水稻作を行う場合は灌漑用水の確保が必須の条件となる。磁県はまずこの条件をクリアしていた。

第二に挙げられる要因は栽培方法が主に直播法であったと思われることである。直播法の利点は2つあり、1つは旱魃対策という点であり、2つめは投下する労働量が少なくてすむ点である。1点目については堀江(2015: 56)がアジア・アフリカの天水田での水稻作を俯瞰した時、旱魃と冠水の危険度の高い地域では直播法が卓越することを指摘しているが、中国の華北では旱魃の方が水害より発生回数が多いので<sup>13)</sup>、主に旱魃対策のために直播法が採用されたと思われる<sup>14)</sup>。2点目の直播法の投下労働量の優位性については、移植法との比較ですでに多くの指摘がある。水稻作について、ブルック(1986: 653)の引用した光緒『保定府志』やバック(1938下: 177)の統計が労働量や労働日数の多さを示しており<sup>15)</sup>、

12) 華北はおおむね年間降水量1000mm以下の地域に属している(バック1938上: 186)。

13) バック(1938上: 215-216)によると耕作物の20パーセント乃至はそれ以上を破壊した天災について、1904-29年にわたりその主要な原因を重大さ順に並べると、旱魃が1位、洪水が2位とされ、旱魃は小麦地帯(バックの農業地理区分の一つ[以下、同様]、淮河・秦嶺以北)の方が水稻地帯(淮河・秦嶺以南)よりも多いとされ、発生件数も水害よりも多いとされる。また葛(2011: 91)によると華北では5世紀中葉、6世紀後半、8世紀後半、11世紀後半と17世紀前半には5年に一度深刻な旱魃があったとされており、前近代の事例を見ても華北に旱魃が多かったことがうかがえる。従って、華北の小麦地帯に属する磁県で、直播法が継続されたのも旱魃対策が主な理由の一つであったと思われる。

14) 乾燥帶に属する寧夏回族自治区で現在でも直播法が主流であることも(楠谷ほか2018: 678)、この点に符合していると思われる。

15) 光緒『保定府志』卷21に「北方民習農家之業、水田耕耨、其勞十倍岸地、多致坐廢生業、人事不齊(北方の民で農業を習熟するものは、水田の耕作と草取りは、その労力が畠地の十倍なので、多くが居ながらにして生業の農業を廃れさせるに至り、生活が成り立たない)。」とある。なお、『保定府志』などの地方志は同名のものが各時代に編纂されるので、編纂された元号を冠して区別される。後出の『畿輔通志』も同様である。光緒は清末の1875-1908年の元号である。

また、バック(1938下: 177)の統計によれば、移植法だったと思われる水稻作地帯の水稻作に必要とされる1エーカー当たりの労働日数は82日で、小麦作地帯の小麦作の23日の約3.6倍となる。

更にブルック(1986: 653)が労働量や労働日数の多さが水稻作を始めるうえでのハードルとなったと指摘しているように、畑作に慣れた華北農民にとっては同じ水稻作でも移植法より労働負荷の小さい直播法を始めるほうがよりリスクを回避できたものと考えられる。近代以降も、直播法は労働力となる人口の少ない地域の栽培法として推奨されており<sup>16)</sup>、同様な考え方のもと、古代の磁県(磁州)でも直播法が広がったものと想定される。

第三の要因としては、水稻作をする農家(以下、水稻作農家と略記)が自家で日常的に食べており、自家消費用に栽培していたことが挙げられる。游(1995: 299)によれば華北の民は稻米食に慣れておらず、時代や地域によっては稻米食が好まれなかつたという。その論拠の一つとして、つとにブルック(1986: 653)が着目した雍正『畿輔通志』卷46の雍正帝(在位1722-35)の下記の言葉を引用している。

北方人不慣食稻，恐運糶，不時售大賈，居積則賤而傷農於每歲秋冬。發帑收糶，民獲厚利。

北方の人は稻米を食べ慣れないため、売りさばくことを心配し、収穫すると時を置かずに大商人に売却してしまうので、在庫が累積して価格が安くなり、毎年秋から冬にかけて農家に損害を与えている。内帑金で稻米を買い入れて(値崩れを防ぎ)、農民が大きな利益を得られるようにせよ<sup>17)</sup>。

北方の農民が稻米を食べ慣れないことが原因で収穫した稻米を上手く売却できずに値崩れを起こしてしまうケースが生じている事例である。これに対して、磁県の場合、民国『磁縣縣志』第7章第1節風俗二の食の項に

普通民食均以小米爲大宗而佐以高粱・玉蜀黍及黍・菽等糧。至種稻各村則間以大米，種麥各村則間以小麥。

一般的な民の食事はひとしくアワを中心とし、高粱・とうもろこし・キビ・マメなどの食糧を補助食とする。水稻を栽培する村々に至っては稻米をまじえ、麦を栽培する村々では小麦をまじえる。とある。ここで注目すべきなのが、一般的な県民はアワを中心とした雑穀類を主食としており、水稻作農家以外は稻米を食べていない点及び水稻作農家であっても稻米だけを食べていた訳ではない点である。ここから、水稻作農家で収穫の一部ではあるが、稻米が日常食として自家で食べられており、自家消費用としても水稻の栽培が継続されてきたことを想定できる。そして自家で実際に日常的に食べていたということは、水稻作農家が稻米の味を知っており、商品としての価値も認識していたということであり、これが次に挙げる稻米の販売の問題とも関わってくる。この点が日常的な稻米食の風の無かったと思われる寶坻県の場合と大きく異なっている点である<sup>18)</sup>。

16) 于(2021: 125)に「当然除了氣候寒冷，稻生长期短，人少地多的黑龍江，新疆，寧夏，內蒙古等省・自治区有一定面積的直播栽培外，……(当然、我が国では気候が寒冷で、稻の生长期間が短く、人口が少なく土地の多い黒竜江、新疆、寧夏、内蒙古等の省や自治区では一定面積の直播法が行われている外は……)」とある。また、移植法の方が、単収が多いので、中国では解放後に移植法が導入されたが、1980年代半ば頃には、「雖然多數能增產，但由于增加了成本，增產不增收，經濟効益低(増産できる事例が多數あったけれども、しかし、生産費が増加したことにより、増産しても增收にならず、経済効率は低かった。」(中国農業科学院 1986: 685)とされているように、増産できても增收につながらず、経済効率のよい栽培法ではなかったことも、直播法の継続を促したと思われる。

17) ブルック(1986: 653)はこの史料を訳す際に「農民因此不復樂于種稻(農民はこのことで再び稻を植えることを喜ばなくなった。)」という言葉を補っている。ブルック(1986: 653)を参照した游(1995: 299)もこのブルックの訳文を「從而使農民更不願種稻(よって農民が更に稻を植えることを望まないようにさせている。)」と解釈して自説の一部に盛り込んでいるが、原文にはこのニュアンスは見えないと思われる。

18) 乾隆『寶坻縣志』卷6風物・風俗の条に「梗稻則留以餉賓(ウルチ稻は保存しておいて賓客の食事とした。)」とあり、清の乾隆年間(1736-1795)頃には稻米の栽培がある程度定着したが、同巻物産の条に「稻梗收入少，人恒惜之(ウルチ稻は収穫が少なく、人々は常にこのことを惜しんだ。)」とあるように収穫量が少なかったこともあり、一般の県民は稻米を食べていなかったので、明代(1368-1644)末に袁黃が水稻作を導入する以前は一般の県民に稻米食の風はなかったと思われる。

第四に挙げられる要因は稻米が、商品作物（販売・換金目的で栽培される作物）として高値で取引されたと思われる点である。先に見た雍正『畿輔通志』の記述に見える稻米食の風の無い地域で稻米が値崩れを起こしたこととも関わるが、稻米が高価な商品として取引されるのであれば、販売目的で栽培されることも起り得る。実際、磁県でも水稻作農家以外の庶民は稻米を食べておらず、水稻作農家でも収穫した稻米の一部しか食べていないので、稻米は県外に販売する目的もあって栽培されていたと思われる。稻米は華北では賓客などに供する貴重な穀物とされていることが多く、寧夏回族自治区でも稻米は高値で取引される一種の経済作物（商品作物）であったことが指摘されている<sup>19)</sup>。この点については、磁県の場合も同治『磁州縣志』第7章第1節風俗一の民生に

若強爲分析・比較則水田區域較爲優厚，山岡・旱地多屬困苦。

県民を強いて分析・比較すると、水稻作を行っている地域は比較的裕福で、山岡や畠作地域は多くの場合、生活が苦しい。

とあり、水稻作を行っている地域は比較的裕福とされるので、自家で食べる量を生産した稻米の一部に止めて、残りの稻米を販売分に回し、それが高値で売却されていたことが推測できる<sup>20)</sup>。

第五の要因としては、先に見た同治『磁州續志』卷6藝文志の中の楊方晃「知卽墨縣康公傳」にあったように水稻作が塩類土壤の土壤改良のために行われていたことから、塩害対策として継続されたことが考えられる。

以上のように考えれば、①灌漑用水の確保、②直播法の採用、③磁県の水稻作農家の稻米食の風、④稻米の高値による取引、⑤塩類土壤の土壤改良の5点を磁県で長く水稻作が続けられていた要因とすることができるであろう。

## 結語

以上、本稿では磁県（磁州）の水稻作について、それが古代以来、現在まで継続してきた要因を中心に考察してみた。そして、その結果として、水稻作継続の要因として、①水稻作に必要な灌漑用水が十分確保されていたこと、②旱魃対策及び投下労働量抑制策として直播法が採用されたこと、③稻作農家では収穫の一部を日常的に自家で食べており、自家消費用も兼ねて栽培されてきたこと、④水稻作農家が比較的裕福だったことから、稻米が高値で売却されていたと思われること、⑤塩類土壤の改良に効果があったことの5点を得ることができた。

このうち、②の直播法については、華北で古くから水稻作が行われてきた地域に共通してみられる事象であるが、磁県の水稻作の特徴は一部の地域で移植法が伝導されたものの、恐らくは五代以前から行われてきた直播法が続けられたことであり、水稻作の技術が地域によっては直播法→移植法という進歩的に単線的発展をする訳ではないという点は、華北における水稻作史を考える上で、注目しておくべき事実であろう。また華北には唐山市の玉田県のように元代より移植法が行われて現在に及んでいる事例も確認できる。華北で継続してきた水稻作を考える上で、こうした違いが生じた要因を究明することが更なる課題となるが、その点は稿を改めて論ずることとして、ひとまず本稿を結ぶこととした。

19) 葉(1969: 87)に「故稻米在寧夏亦爲一種經濟作物（それ故に稻米は寧夏にあっては、また一種の經濟作物〔商品作物〕であった。）」とある。

20) 清末民国期の湖北省の事例であるが、中林(2012: 119)は稻米を生産した農家が効率よく金銭を入手できる稻米の自家消費用としての利用を極力抑え、極力売却用のストックに回していたことを指摘している。

## 引用文献

### 〔和文文献〕

- 大澤正昭 (1996) 「唐代江南の水稻作と經營」 大澤正昭『唐宋變革期農業社會史研究』 pp.197-234、汲古書院 (本論文の初出は中国史研究会編『中国史像の再構成 国家と農民』(1983) pp. 129-169、文理閣)。
- 楠谷彰人・江勇次・崔晶 (2018) 「中国稻作紀行——寧夏回族自治区の稻作」『農業および園芸』93(8): 675-684.
- 田中耕司 (1997) 「稻作技術の類型と分布」 渡部忠世編『稻のアジア史 I アジア稻作文化の生態基盤——技術とエコロジー』 普及版 pp. 213-276、小学館。
- 中林広一 (2012) 「都市の食、農村の食——清末民国期、湖北省における日常食の階層性」 中林広一『中国日常食史の研究』 pp. 97-127、汲古書院 (本論文の初出は『中国研究月報』(2010年) 64(5): 15-28)。
- 林良育 (2015) 「『齊民要術』に見える水稻作——「歲易」の解釈を中心に」『社会経済史学』80(4): 73-92.
- 林良育 (2021) 「『齊民要術』に見える北土高原の水稻作について」『アジア・アフリカ言語文化研究』102: 157-167.
- 林良育 (2024) 「『四時纂要』に見える水稻作について」『歴史と経済』265: 1-16.
- 原宗子 (2016) 「古代黃河流域の水稻作地点」『流通経済大学創立五十周年記念論集』 pp. 667-684.
- 堀江武 (2015) 「イネと稻作の生産生態的特徴」「アジア・アフリカ稻作の多様な生産生態と課題」 堀江武編著『アジア・アフリカの稻作 多様な生産生態と持続的発展の道』 pp. 14-40; 41-75、農山漁村文化協会。
- バック、ロッシング (1938) 三輪孝・加藤健共譯『支那農業論：支那に於ける土地利用』上・下巻、生活社。

### 〔中文文献〕

- ブルック、ティモシー(ト正民) (1986) 「明清兩代河北地区推廣種稻和種稻技術的狀況」『中国科技史探索 Explorations in the history of science and technology in China』中文版、pp. 633-656、上海古籍出版社。
- 葛全勝等 (2011) 『中国歷朝氣候變化』科学出版社。
- 李樹棟 (1963) 『寧夏的水稻栽培』寧夏回族自治区人民出版。
- 潘明濤 (2015) 「何處是稻浦：16世紀以來澇水上游稻作的歷史變遷」『歷史地理』32: 214-224.
- 孫作家主編 (2001) 『磁県志』新華出版社。
- 葉祖灝 (1969) 『寧夏的今昔』臺灣商務印書館。
- 王利華 (2000) 『中古華北飲食文化的變遷』中国社会科学出版社。
- 游修齡 (1995) 『中国稻作史』中国農業出版社。
- 于振文 (2021) 『作物栽培各論 北方本』第三版、中国農業出版社。
- 曾雄生 (2018) 『水稻在北方 10世紀至19世紀南方稻作技術向北方的伝播与接受』廣東人民出版社。
- 張沢咸 (1999) 『隋唐時期的農業』文津出版。
- 中国農業科学院主編 (1986) 『中国稻作学』農業出版社。

### 〔WEB ページ〕

磁県人民政府ホームページ

<http://www.cixian.gov.cn/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=40&id=413> (2025年11月4日参照)